

追悼 森田 穰先生を偲んで

日本IVR学会 理事長
吉川公彦

森田 穰先生、謹んで先生のご逝去を悼み、ここにIVR学会を代表してお別れの言葉を述べさせていただきます。

先生は私たちIVR学会員にとり、余りにも大きな存在であり、先生の業績はIVRの歴史そのものです。昭和49年にホテルオークラの一室でfilm sessionの形で始まった日本血管造影IVR研究会発足当初から、先生はコアメンバーとして活躍し、IVRの開発、普及、発展に多大なご尽力をされました。

平成7年IVR研究会がIVR学会に移行した年から理事に就任され、編集委員長としての重責を果たされるとともに、同年札幌で第24回日本血管造影IVR学会を主催されました。

見事な学会運営に加えて、小樽水族館でのパーティーは先生らしいユニークな企画で、今でも多くの学会員の記憶に残っています。

退官後も後進の指導に尽力されるとともに、海外を含めて多くの学会に出席され、執筆活動も積極的に続けられました。平成20年IVR会誌に掲載された15ページにおよぶ特別寄稿「IVRの歩んできた道、歩む道」は125編の引用文献と先生の緻密な調査に基づく圧巻な論文で、その後多くの先生が講演で引用されています。先生はIVRの歴史を詳細に振り返りながら、次のように述べておられます。「何よりわれわれを勇気づけてくれること

は、いかなる手技や器機の開発も“天才的ヒラメキ”ではなく先行する何かがあり、それを目標に不断的努力を続けることが成功の鍵であることが示された点である」と。これこそが、何事にも純粹で常に研究熱心で真摯に取り組まれてこられた先生の人生そのもののような気がします。

さらに、先生に最後に投稿頂きました「血管造影の夜明け—バルーン血管造影法の発達—」は、今では一般的となったバルーン血管造影法について、45個の図、107編の引用文献をもとに、開発の経緯や歴史について細かく記されており、この度IVR学会誌に掲載させて頂くことになりました。原稿の冒頭で記されておられる、「過去のことを知り、未来に繋げる“力を生み出す何か”を得るためにB-カテが歩んできた道を振り返り明日に繋がる“発想”の糧にして頂ければ幸いである」というお言葉は大変印象深く、IVR学会として先生の御遺志を後世に継承していきたいと思います。

先生は私の恩師であります故打田日出夫先生との親交が深かったこともあり、奈良での学会の折には奥様とご一緒に何度もお越しいただき、いつも満面の笑みを浮かべながら、温かい言葉をかけてくださいました。また、海外の学会でも何度かご一緒させて頂き、ドイツ、ギリシャ、チェコなどで外国の著名な先生方をご紹介頂き、交流する機会を持てたのは、私にとっても本当に幸せなことでした。

先生はお酒が好きで、酔ってこられると、大きな手で隣の先生の肩を何度もたたきながら、熱弁を振るわれました。そんなこともあり、会が始まる前に今日は誰が森田先生の横に座るか議論になることがよくありました。そんな熱い先生のお話をもう聞けないのは本当に残念です。

長年にわたる温かいご指導に感謝するとともに、心から哀悼の意を表します。

森田先生、長い間本当にありがとうございました。どうかやすらかに眠ってください。

平成30年7月29日

日本IVR学会理事長
奈良県立医科大学 放射線医学教室 教授
吉川 公彦



1996年プラハで開催されたInternational Workshop on Interventional Radiology
左より筆者、Rosch先生、森田先生

北海道IVRの父 森田 穰先生を偲んで

札幌東徳洲会病院 画像・IVRセンター センター長
齋藤博哉

5月19日に奥様からのメールで森田穰先生の訃報に接しました。昨年末、再入院されてからの闘病生活の中で、ほんのわずかではありますが回復に向かっているとの話を耳にする度に、必ずまた復活してくださると信じておりました。亡くなる少し前のことだったと思います。夢の中で先生にお会いしました。研究会の懇親会で、少し痩せられた先生が、ビールが入ったグラスを持ちにこやかに立っておられました。私が、先生もうビール飲んで大丈夫なのですかと聞くと、先生は「今日はるり子(注 森田夫人)がいないから大丈夫!」といたずらっ子のように笑っておられました。夢から覚めたとき、ああこれは正夢になる、と信じていただけに本当に残念です。

私は、森田先生から血管造影・IVRの手ほどきを受け、育てていただきました。先生はカテーテル操作を教えて下さるとき、言葉ではなく、私にカテーテルを握らせたまま、大きなグローブのような手で私の手を包みこみ、手ごとカテーテル操作をすることで教え込んでくださいました。先生はその偉丈夫な体躯などから「豪快」と受けとられがちですが、実際には繊細で手先も非常に器用な方でした。そのことで思い出されるのは一緒に毎週行っていたリンパ管造影です。当時は足背リンパ管造影法でした。先生が外来をやっておられる診察室の傍らで毎週2例ずつ行っていました。うまくいかずに足背をザクザクにしながら私がSOSを出しても、診察の合間に、8.5号(!)の手袋をしたあの大きな手で、サクサクと尻拭いをしてくれたものです。

森田先生は北海道IVRの先駆者であり、「北海道IVRの父」とも呼ばれておりましたが、最初は外科医として医師としての人生をスタートされました。卒業後直ちに北海道大学第一外科に入局され、消化器外科医として研鑽を積まれておりましたが、血管造影を学ぶため放射線科に学内留学されました。2年くらい在籍するつもりだったのですが、血管造影の魅力に取り憑かれ、以後は放射線科医(Angiographer)一筋でその生涯を終えました。森田先生は外科出身らしく、常に治療する側の立場から血管造影を行い、その評価を行ってこられ、われわれは常に治療を念頭に置くように

指導を受けてきました。森田先生が外科医に戻ることなく、生涯放射線科医として血管造影・IVRを探求されたのは、平松京一先生、山田龍作先生、故 打田日出夫先生の3先生の影響を強く受けられたことが大きな要因であり、3先生を生涯敬愛してやむことはありませんでした。「IVRの歩んできた道、歩む道(IVR会誌23:285-299,2008)」にも、「本邦におけるこれ迄のIVRの進歩を率先し支え続けたのは本邦“IVRの御三家”といわれる“導入の平松京一”、“開発の山田龍作”、“発展の打田日出夫”の三先生であり、改めて敬意を表し感謝申し上げたい」と記載しておられます。

この8月で70回を数えた北海道血管造影・IVR研究会を始められ、北海道IVRの普及・発展・教育に尽力されました。この研究会は外科医を経験された先生ならではの発想で、外科・内科など他科の先生方とのコラボレーションで運営している全国でも類を見ないIVR研究会で、現在もその思想を受け継いで運営しています。

記念すべき第20回研究会で、先生は「IVRの現状と将来」と題し、平松、山田、打田3先生をお招きし基調講演、それに引き続いて森田先生を司会に鼎談という夢のような企画を実現されました。その後何年たっても、この企画について何度も何度も嬉しそうに話され、生涯宝物にしておられました。

ここで改めて森田先生の生涯を研究や論文・学会発表のテーマに着目して見てみますと、時代ごとに色分けがなされています。

1975～85年頃 甲状腺・副甲状腺の動脈・静脈造影法

1978年頃より、小児腫瘍の動脈造影

1984～87年頃には、肝胆膵領域疾患の血管造影による画像診断

1987～90年頃には、外傷や術後・消化管出血や内臓動脈瘤に対する動脈塞栓術

1991～95年前後は当時、門脈圧亢進症ではTIPSが話題の中心でしたが、その波に流されることなく、同時性バルーン閉鎖下塞栓術等の塞栓術や門脈ステントなど門脈圧亢進症に関する論文を多数発表されています。

北海道大学医療短大を退官後は、血管造影・IVRの歴史をテーマにされています。

その成果は前述の特別寄稿「IVRの歩んできた道、歩む道」であり、2017年に日本IVR学会誌には「血管造影の夜明けー胸～腹部大動脈造影法ー」というタイトルで総説論文を発表されました。この総説では、胸腹部大動脈造影法の開発が始まった1929年、Forssmannのカテーテルによる右心房到達法、DosSantosの経腰的大動脈造影法から、1956年のSeldinger法による胸～腹部大動脈造影、そして選択的大動脈主要分岐枝造影法が芽生えるまでの30数年間の軌跡を、胸～腹部大動脈造影法の概念、発達と分類、診断価値、補助手段、合併症の項目に分けて詳細に記述されました。さらに入院される直前まで執筆され遺稿となった「血管造影の夜明けーバルーン血管造影法の発達ー」は、今では一般的となったバルーン血管造影法について、多数の図、引用文献をもとに、開発の経緯や歴史について細かく記されており、今号に掲載となっています。

森田先生は私の師匠であります、私の父のようであり、兄のようであり、そして時折見せるあの底抜けに無邪気な笑顔は、友人のようでもありました。医療短大時代の森田先生のお部屋は血管造影のフィルムとスライド、文献で溢れていました。その中で、先生が入れてくれたコーヒーをのみながら、自慢の症例のフィルムと一緒に眺めていたことが昨日のことのよう思い出されます。私からみて先生の生活すべてがAngiographyとIVRでした。長年にわたる先生の温かいご指導、先生を通じて形成された多くの人とのつながり、苦しかったとき支えて下さり、また、一緒に泣いてくださったことなどが次々と思ひ出されます。森田先生、長い間本当にありがとうございました。どうかやすらかに眠りください。

ご 略 歴

昭和15年1月1日 北海道函館にて生まれる
昭和33年3月 麻布学園卒業
昭和42年3月 北海道大学医学部医学科卒業
昭和43年4月 北海道大学医学部第一外科入局
昭和47年4月 北海道大学医学部放射線科助手
昭和49年7月 北海道大学医学部放射線科講師
昭和59年8月 北海道大学医学部放射線科助教授
昭和59年9月 ミュンヘン大学医学部放射線科
(西ドイツ政府招聘交換教授)
昭和60年4月 北海道大学医療技術短期大学部
診療放射線技術学科教授
平成7年 日本血管造影・IVR学会 理事,
編集委員長
平成7年6月 第24回日本血管造影・IVR学会
会長
平成9年4月 北海道大学医療技術短期大学部部
長, 北海道大学評議員
平成15年4月 北海道大学医療技術短期大学部
名誉教授
平成20年 特別寄稿「IVRの歩んできた道,
歩む道」掲載
平成30年5月19日 ご逝去